

大蔵虎寛本の「われわれ(我々)」をめぐって

大倉 浩

キーワード：われわれ、われら、狂言詞章、

虎寛本

○、はじめに

要旨

自称代名詞(複数)「われわれ(我々)」は十六世紀の文献には現れているが、キリシタン資料でも用例は稀で、十七世紀前半の狂言台本でも用いられていない。十七世紀以降江戸時代の「われわれ」は、武家言葉とも指摘されるような特徴を持つているが、十八世紀の大蔵虎寛本には用いられており、以後の大蔵流狂言台本には用例が認められ狂言記拾遺にも関連する用例がある。虎寛本以降の狂言台本での「われわれ」の用法から、単なる当代語の混入ではなく、狂言詞章としての意識的な使用と考えられる。

十七世紀前期寛永年間書写の大蔵虎明本狂言(以下「虎明本^{註1)}」と、後代の大蔵流宗家虎寛が十八世紀末寛政年間に書写した虎寛本狂言(以下「虎寛本」)との比較は、江戸時代に固定化類型化していく狂言詞章の変化をとらえるうえで一つの目安となっている。室町時代の成立・流動期から、江戸時代に能と共に武家の式楽として、固定・伝承期を迎える狂言であるから、その詞章の変化も大づかみに言えば、多様で雑多なものが整理類型化していく変化ではあるが、実際にその詞章を比較してみると、江戸時代の日本語の変遷と様々に絡み合いながら変化しており、決して一字一句まで固定したセリフが伝承され繰り返されているわけではない。その中でも待遇表現に関わる語句は、セリフ劇である狂言にとって、人物関係を端的に観客

に伝えることが出来るキーワードであり、整理類型化が明確に現れている。既に文末表現などについて論じた先行研究¹¹²⁾は多いが、ここでは自称複数の代名詞「われわれ（我々）」を取り上げ、虎寛本以降の大蔵流台本の変化も追うことで、この語の変遷を狂言台本から考えてみる。

一、「われわれ」と「われら」

虎寛本「三本の柱」では、シテである果報者が、太郎冠者たちの最近の普請での働きをねぎらう言葉をかけると、それに対して、太郎冠者が次郎冠者・三郎冠者を従えて次のように返事をする。

①（太郎冠者）左様に思召て下さるれば、我々も骨を折た甲斐が有て、近頃、な、（太郎冠者・次郎冠者・三郎冠者）忝う存まする。
「三本の柱」 117ペ。

主人である果報者に対して、家臣である太郎冠者は、自分たちを「われわれ¹¹³⁾」と自称している。この部分を虎明本で対照してみると、

②（冠者ども）誠におびたしひ御普請で御ざるに、何事もなふ、成就仕て、われらまどうれしう御ざると皆申事でござる

「三本の柱」 99ペ

このように、三人の冠者は「われら」と自称している。

実は虎明本全体を見ても「われら」は使用されていても、「われわれ」は全く用例がない。索引のあるものも含めて狂言台本の「われわれ」「われら」の用例数を概観してみると、以下のようになる。（鶯流の調査はまだ途中だが「われわれ」は見当たらない）

表1（謡や語りの例を含む）

天正本	われわれ	われら
祝本	0	4
虎明本	0	84
天理本	1	43
版本狂言記	2（拾遺）	15
虎寛本	8	14
三百番集本	5	47
大系本	15	29
全集本	5	1

十七世紀半ばまでに成立した天正本・虎明本・天理本には、「われわれ」がほとんど用いられていない。唯一の用例は、天理本だが、これも「清

水観音」の小歌の一節で、座頭が瞽女に歌いかける場面に、

③シテ 我々観音に参詣申、きねんをいたす
にかくばかり、若々ぬしなき人やらん

「清水座頭」抜書47ウとあって、影印本でみても確かに「我々」と踊り字がある。だが、北原・小林『狂言六義全注』では「虎明本・三百番集本では「われ観音に」と続けている。」と注しており、北川ほか『天理本狂言六義』では、踊り字を(ら)と訂して、「我ら」と読んでいる。ともに「われわれ」の確例とは考えていないようである。筆者も以下に述べるような「われわれ」の天理本当時の勢力からも、「われ」の誤りと考えている。というのも、天理本以上に近世の日本語の混入の多い版本狂言記でも、正篇・外篇・続篇には「われわれ」の用例がなく、自称複数には「われら」が用いられており、「われわれ」はわずかに二例が、享保一五(一七三〇)年刊の拾遺、それも「三本柱」にだけ現れ、以下の④の例のように、

④太「御意なされます通り 思召ままに御普請が出来ましてわれわれもよろこばしふ存ます
「三本柱」巻一ウ

虎寛本の例①と虎明本の例②にまさに対応する部分の例であり、残る一例も同様に虎寛本で「わ

れわれ」が用いられているのである^{注5}。この拾遺の「三本柱」は、「われわれ」以外にも虎寛本はじめ大蔵流狂言との類似が多い曲であり、詞章においても大蔵流との関連が考えられる。

また、表1からわかるように、狂言台本において「われわれ」が用いられてくるのは、十八世紀以降の固定期の台本からであり、用例数も「われら」よりも少ないものがほとんどである。この状況は固定期の台本に「われわれ」がたま紛れ込んだもののようにも解釈できるが、版本狂言記で虎寛本と同じ「三本柱」だけに「われわれ」が使われているなど、次節で触れる当時の話し言葉での「われわれ」の位置を考える、十八世紀狂言固定期の大蔵流での、何らかの意識的な使用と解釈できるのではないかと思われる。

二、十六世紀末から十八世紀の「われわれ」と「われら」

では、狂言台本以外の当時の文献^{注5}では「われわれ」と「われら」はどの程度現れているのだろうか。

表 2

平家物語(覚一)	0	われわれ
エンボ	0	われら
ヘイケ	0	
捷解新語原刊本	0	
同改修本	8	
きのふはけふの物語	29	
醒睡笑	30	
近松世話物	29	
西鶴集	70	
浮世風呂	13	
東海道中膝栗毛	3	
	2	

『平家物語』（覚一本）やキリシタン資料では「われわれ」の用例が見られないが、『日本国語大辞典』や『時代別国語大辞典 室町時代篇』によると、御伽草子や抄物の例が挙げられており、十六世紀には「われわれ」という語自体は存在していたようである。小松寿雄（一九八五）によると、

ワレワレは、湯沢幸吉郎博士の『室町時代言語の研究』や『ロドリゲス日本大文典』では、言及されていない。『日葡辞書』に

も載っていない。室町時代にはあまり重要な語ではなかったであろう。管見に入つたものとしては、鈴木博氏『周易抄の国語学的研究』、「ラポ日辞書」などにはとりあげられている。鈴木氏によれば、この語は反照代名詞で、「メイメイ」の意味のようである。「この『ワレワレ』は『自分々々』『めいめい』『それ／＼』の意と思われる。今日『われ』の複数として使うもの（英語の *we* にあたるもの）とはすこし径庭がある。」と説明される。武家言葉のワレワレは、英語の「または *we* に当たり、このような自称としての用法は室町時代に稀だったのではないかと思う。にもかかわらず、寛永の武士はこれを自称として用いているのである。（中略）このように室町口頭語では余り使わなかったワレワレを、近世初頭武士が自分たちの自称として採用し、武家言葉（武家の言葉の特徴的部分）を形成していったのである。」⁷⁴

とあり、近世初期には、武家言葉として、品位はあるものの特定の階層が用いる当代性の強い語であったことが指摘されている。

実際には、次の『きのふはけふの物語』の例のように

⑤ 女房ききて「仰せのごとく、、我々身に
へても惜しき物の候」 122 ペ

女房が夫に対し自称（それも単数）で用いている例もあり、江戸時代初めから武家言葉と限定してよいか疑問もあるが、十七世紀半ばに固定期に入った狂言においては、少なくとも「われわれ」のもつ当代性が詞章としてはふさわしくないと排除されていたのであろう。また、キリシタン資料でもほとんど用例が無いことから、自称の複数を示す代名詞としては、前代からの「われら」の勢力が、まだ続いていたということでもある。

しかし、注目すべきは『捷解新語』の原刊本と改修本での「われわれ」の状況である。

⑥ 我等國は禮が固うて、一度定めた後は變われまるせん程に、、 (原刊本卷三)

⑦ 我々の國は禮が堅ふて、一度定てからは改めまする事は御座らぬ。(改修本卷三)
のように原刊本「われら」から改修本「われわれ」に替わった対応例が一〇例以上対照され、ちようど虎明本「われら」(例②)から虎寛本「われわれ」(例①)、拾遺(例④)に変化した状況に似ている。

『捷解新語』についてのこうした事実自体は、既に安田章(一九七三)「重刊改修捷解新語解

題」で指摘されており、安田も、単に歴史的な代名詞の変遷の例ではなく、待遇表現の体系的整理が絡み合った文体的変遷のなかで慎重にとらえようとしていることは重要である。

近松世話物(例⑧)や西鶴作品(例⑨)を見ても「われわれ」が、「われら」よりは少ないものの、複数を示す自称として十八世紀の上方の日本語に定着し始めていることがわかる。

⑧ なになう二人の魂たましひとや。はや我々は死したる身か。 『曾根崎心中』 34 ペ

⑨ 世之介中にも子細らしき女に「われわれは何者とみえます」といふ。

『好色一代男』 144 ペ
山崎久之(一九六三)による近世初期の待遇表現体系では、「おまへ」段階「こなた」段階に武士・公卿が用いる語として「われわれ」を位置づけており、「そち」段階でも「われわれ」が現れる場合には、

この語はいかつい語感があつたと見えて、武士が「そち」段階に対する威厳語としても使用している。

と述べていることは注目される。山崎(一九六三)によると十八世紀の上方の日本語として、主に対等以上の聞き手に対し武士が用いる畏まりと威厳を持った自称の代名詞が「われわれ」

であり、特定の階層に結びつきやすいものであったことがわかる。

このようにして「われわれ」は、十八世紀上方語での定着も限定的なものにとどまり、十九世紀の江戸語においても話し言葉での「われわれ」の勢力は、武家言葉にとどまっていたようである。池上秋彦（一九六四）の人情本の調査でも、「われわれ」「われら」の用例自体が少ないことを指摘し、「われら」も既に文語化して両語ともに江戸語のなかでは特殊なものとしている。

たとえば『東海道中膝栗毛』では、「われわれ」が一〇例あるが、

⑩ われわれはふたり川越ふたりにて酒匂のか
はにべてよふたり 70ペ
のように、弥次郎が折々に詠む狂歌の中の例がほとんどである。

十七世紀以降固定化する狂言の詞章に、十八世紀当時の狂言師たちが、「われら」に代わって「われわれ」を使ったとすると、当時の観客たちが意外に思われないような無色透明な代名詞ではなかったと考えられる。虎寛本をはじめとする「われわれ」の使用は、不用意な混入ではなく何らかの意識的な使用と見られるのではないか。

三、虎寛本の「われわれ」と他台本

前節で見たような、十七世紀以降の「われわれ」の変遷を踏まえて、虎寛本以降の大蔵流狂言台本での「われわれ」の使われ方を見てみよう。

虎寛本では「三本柱」の例①以外に

⑪（シテ）誠に、こなたの田は、あぜをかぎつて能う出来て、我々迄も、な、（シテ・次郎冠者）悦ばしい事で御座る。

など、冠者たちから主人に向けての自称、「きつねづか」中93ペ

⑫（若衆一）いかに長道具じやと申ても、我々が加勢致しまする程に、必ず氣遣はせらるるな。 「老武者」中506ペ
のような若衆たちの自称（「財宝」にはやはり若い孫たちの自称の例がある）、

⑬（シテ）夫は幸な事じや。我々も都へ登る者じやが、連ほしうて此所に待合せて居た。御供致う 「ふたり大名」上337ペ
のような大名たちの自称など、武士の言葉と見られるものが6例と多いが、その他に、

⑭（シテ）其跡から、三十四人の公達の出させられて、やい太郎くはじや、汝はとと様

かか様へは粟を進上申て、なぜにわれわれへはくれぬぞと仰せられて御座るに依て

「栗焼」中 34 ペ

では、公達たちの自称の引用、

⑮ (算置) 是は我々の存 (ぞんぜ) いで叶はぬ事で御座る。「めぐひ」中 23 ペ

では、算置きの自称に現れており、いずれも複数を示し、男性が用いている点で共通している。いつぼうの「われら」は

⑯ (シテ) 誠に、天下治り、目出度い御代で御されば、我らごときの民百姓迄も、足手

息災に、毎年毎年御年貢を納ると申すは、近頃めでたい事で御ざる。

「三人夫」上 170 ペ

⑰ (ワキ、謡) 我らが吹を面白がるは、いかなる人にてましますぞ

「楽阿弥」中 330 ペ

など、男性の自称には限られているが、これら単数の例や百姓や僧侶の例もある点で異なっている。「われわれ」も「われら」も虎寛本全体の中では用例数は少ないが、特に「われわれ」は武士たちの自身の畏まりの意味合いが表れている例が多いことがわかる。

それに対し虎光本はもつと「われわれ」が少ない。同じ大蔵流でも分家である八右衛門家の

台本であるためだろうが、ただし虎寛本の例⑫「二人大名」と例⑮「めぐひ」に類似のセリフがあり、ともに「われわれ」が用いられていることから、やはり十八世紀の大蔵流では、宗家でも分家でも特定の曲に「われわれ」が用いられていることがわかる。

⑱ (シテ) 夫は一段の事ぢや。我々も都へ登る物でおりやるが連ほしうて此所に待ていた(二人) いざ御供致ふ

「二人大名」二 398 ペ

さらに、虎寛本の系統の幕末の山本東本に拠った大系本では、虎寛本の「われわれ」の使用が拡大している。というのも、虎寛本「三本柱」「二人大名」「栗焼」「狐塚」「居杭」の「われわれ」のセリフが、ほぼそのまま山本東本でも現れている(例⑲など)のだが、

⑲ (太郎冠者) さようおぼしめして下さるれば、我々も骨を折ったかいが、ナア(太郎冠者・次郎冠者・三郎冠者) あると申すも

のでござる 「三本の柱」上 62 ペ

それに加えて

⑳ (参詣人甲・乙) 現れ給い我々に賜る福はどれどれぞ 「毘沙門」上 76 ペ

など、参詣人たちの自称や、㉑ (佐渡) それはかたじけのうござる。さて

我々はもはや（佐渡・越後）お暇仕りま
しょう 「佐渡狐」上 96ペ

㉔（腰元）申し申し、我々を待たせて、こな
たはどれへござるぞ 「釣針」下 105ペ

など、百姓（例㉑）や女性（腰元・例㉒）の使
用にまで拡大している。詳しくは次節でも述べ
るが、これは、十九世紀後半幕末・明治の話し
言葉になって、それまで「われわれ」が持つて
いた時代性や武家言葉という位相が薄れ、自称
の複数を示す代名詞として広く定着してきたこ
とが背景にあると考えられる。

ただし、同じ幕末の台本でも和泉流の三百番
集では「われわれ」は、大蔵流番外曲「鹿島詣」
などの数例にとどまり、「われら」が依然とし
て多く用いられており、和泉流では「われわれ」
の使用には慎重であったことがわかる。

また同じ大蔵流でも、京都の茂山家の台本を
もとにした日本古典文学全集本『狂言集』では、
「われわれ」の用例は少ない（『狂言集』自体
の所収曲数が少ないこともある）。しかし、少
ない中の例を見ると、虎寛本などが「われわれ」
を用いていた「二人大名」に例があり、

㉕（大名甲）それは一段のことぢや。我々も都
へ上る者ぢやが、何と同道してはおくりや

るまいか。 「二人大名」150ペ

とあって、虎寛本（例㉓）や虎光本（例㉔）、
大系本の詞章とも対応している。このことから
も、程度の差はあるものの「われわれ」の使用
が、十八世紀以降の大蔵流での共通した動きと
捉えられるだろう。

四、十九世紀以降の「われわれ」

「われら」

前節でもふれたが、幕末・明治期の話し言葉
での「われわれ」や「われら」の状況を確かめ
て、大系本の「われわれ」の使用拡大の背景を
探ってみたい。

表2で見たように十九世紀初めの『浮世風呂』
や『東海道中膝栗毛』では、「われわれ」の勢
力は弱いのだが、ヘボン『和英語林集成』¹¹⁾（初
版一八六七年）では㉕のように、「われわれ」
が「われら」とともに立項されている。

㉕ WARERA, ワラ 吾等, plural of Ware. We: also
you, in speaking contemptuously to others.

WARE-WARE, ワラワラ, 吾等, plural of Ware. We.

英和の部でも

㉖ WE, Warera; watakushi-domo; ware-ware.

とあって（再版、三版も同じ）、「われら」が最

初に示されてはいるが、「われわれ」も並んでいる。

また明治になって、仮名垣魯文『安愚楽鍋初編』(一八七一年)には、最初に登場する西洋好きの男の言葉に

⑳ 文明開化と号してひらけてきやしたから我々までが喰ふやうになつたのはにありがたいわけでごス 初編七才

と、「われわれ」が現れ、「われら」はない。明治三八(一九〇五)年夏目漱石『吾輩は猫である』では「われら」十一例「われわれ」十一例と同数で、

㉑ 我等猫族が親子の愛を完くして、、、 元来我々同族間では、、、

のように両語を言い換えるかたちで使われた例もあり、「われわれ」の勢力が広まってきていることがわかる。

太平洋戦争後の『日本国憲法』(一九四六年)の前文では、

㉒ 日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果とわが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、、、

と「われら」が一貫して用いられており、文章

語としての「われら」が根強く残っていることがわかる。現代語では、「われら」はほとんど文章語化しており、「われわれ」も演説口調やあらたまつた語感が、「私たち」よりも感じられる。こうした現代語の感覚で狂言台本を読んでいると、虎寛本や大系本の「われわれ」の使用にも違和感がなく、むしろ虎明本・天理本で用いられていないことが意外にさえ思つてしまふ。しかし、十九世紀までの日本語では、「われわれ」の意味合いが大きく違つていたのである。

五、まとめ

「われわれ」の用例数は、虎寛本をはじめ大蔵流狂言台本全体から見ればわずかであり、固定期の狂言詞章整理の中に起こつた不意な綻びのようにも見える。しかし、本稿で見たように、同時期の複数の狂言台本間での「われわれ」の用例を比較対照してみると、虎寛本を中心に大蔵流の虎光本・大系本・全集本、そして狂言記拾遺が、共通する曲や役柄によつて関連づけられることがわかつた。これは、虎寛たち大蔵流狂言師が生きた時代の言語感覚をもとにした、詞章の「微調整」の結果と捉えられる。

また、驚流や和泉流の狂言台本には「われわれ」がほとんど見出されないことから、江戸期の大蔵流狂言が、式楽として幕府をはじめ諸藩の大名家まで広い勢力を持ち、武家と強く結びついた狂言を志向していたことと、武家言葉「われわれ」の使用が関連しているのではないかと思われるが、まだ十分な例証には及んでいない。さらに、室町時代に「めいめい」「それぞれ」の意が強かった「われわれ」が、自称複数の代名詞に定着していく過程も、狂言台本からは直接探ることは出来ないが、「われら」以外の代名詞「わたくしたち・わたくしども・身どもら」などの比較から考察する必要もあり、残された問題も多い。

注1 本稿で取り上げた主な狂言台本名とテキストは以下の通り、なお、用例の引用には、表記を改め、傍線や濁点を付した場合がある。

天正本…最古の狂言台本、流派不明。内山弘『天正狂言本 本文・総索引・研究』（平一〇

笠間書院）

祝本…固定前、十七世紀前期の台本か。流派不明。永井猛『狂言変遷考』（平一四 三弥井書店）

虎明本…寛永一九（一六四二）年大蔵虎明書写。

池田廣司・北原保雄共著『狂言集の研究』（昭四七）五八 表現代社）

天理本…寛永から正保頃、山脇和泉元宜書写か。

北原保雄・小林賢次共著『狂言六義全注』（平三 勉誠社）、北川忠彦他『天理本狂言六義』（平六）七 三弥井書店）

虎寛本…寛政四（一七九二）年大蔵虎寛書写。

笹野堅『大蔵虎寛本能狂言』（昭一七）二〇 岩波文庫）

虎光本…文化一四（一八一七）年大蔵虎光書写。

文政六（一八二三）年山岸清齋の写本による 橋本朝生『大蔵虎光本狂言集』（平二）四 古典文庫）

古典文庫）

版本狂言記…十七世紀半ば以降江戸期に刊行された以下の四種（各五十番）の狂言記を総称する。正篇…万治三（一六六〇）年刊。北原保雄・大倉浩共著『狂言記の研究』（昭五八 勉誠社）外篇…元禄一三（一七〇〇）年刊。

北原保雄・大倉浩共著『狂言記外五十番の研究』（平九 勉誠社）続篇…元禄一三（一七〇〇）年刊。北原保雄・小林賢次共著『続狂

言記の研究』（昭六〇 勉誠社）拾遺…享保一五（一七三〇）年刊。北原保雄・吉見孝夫

共著『狂言記拾遺の研究』（昭六二 勉誠社）

三百番集・和泉流三宅庄市（一八二四―一八五）

手沢本を主としたもの。野々村成三・安藤常

次郎『狂言三百番集』（昭一三―一八 富山

房）

大系本・江戸末期大蔵流山本東次郎則正書写。

小山弘志『日本古典大系 狂言集上・下』（昭

三五―三六 岩波書店）

全集本・大蔵流茂山千五郎家現行曲。北川忠彦

・安田章『日本古典全集 狂言集』（昭四七

小学館）

注2 蜂谷清人（一九七七）・小林賢次（二〇〇

〇）など。

注3 テキストでは「我々・吾々・われ／＼、」

と様々な表記が成されるが、本稿では「われわ

れ」に統一する。「われら」も同様に「我ら・

吾ら・我等、」等の表記があるが「われら」

に統一する。

注4 拾遺「三本柱」の他の一例は太郎冠者が次

郎冠者・三郎冠者に言う

太「のふ／＼、何とおもやるぞ、是はたのふ人

が我々の知恵をためそふと思ふていひつけら

れた物であらふ

2ウ

という例。虎寛本では、

太郎冠者「頼うだ人の我々が智恵の程を見させ

られう為に、被仰付た物で有う

119 ペ

とあつて、同じく「われわれ」が使われている。虎明本では「たのふだ人の、三人の者の智恵をはからふといふ事であらふ」とある。

注5 『平家物語』『きのふはけふの物語』『近松

世話物集』『西鶴集』『浮世風呂』『東海道中膝

栗毛』については、「日本古典文学大系」（岩波

書店）に拠り、国文学研究資料館「大系本文デ

ータベース」を参照した。他には、エソポ（大

塚光信・来田隆『エソポのハブラス本文と総索

引』平一 清文堂出版）、ヘイケ（近藤政美

・池村奈代美・濱千代いづみ『天草版平家物語

語彙用例総索引』平成一一 勉誠出版）、捷解

新語原刊本・改修本（京都市文学部国語学国

文学研究室『三本対照捷解新語』昭四八 京都

大学国文学会）、醒睡笑（岩淵匡他『醒睡笑

静嘉堂文庫蔵 本文篇・総索引』平一〇 笠間

書院）を用いて調査した。

注6 飛田良文・李漢燮『和英語林集成』初版・

再版・三版対照総索引』（平一一―一三 港の

人）による。

注7 斎賀秀夫他『牛店雑談 安愚楽鍋 用語索引』

（昭四九 国立国語研究所）による。

注8 『漱石全集第一巻』（昭四〇 岩波書店）

による。

注9 中村明『日本語語感の辞典』（平二二 岩波書店）では、「われわれ」を「自分達の意で、やや改まった会話や文章に用いられる硬い感じの和語。（中略）男性は通常の会話でも使うが、女性は正式の場面以外にあまり使わない。」とし、「われら」は「われわれ」の意で堅苦しい会話や文章に使われる、古風でいくらか構えた感じの和語。」と説明している。

参考文献

- 池上秋彦（一九六四）「人情本に現われた一・二人称代名詞について（二）」（『鶴見女子大学紀要第二号』昭三九・一二）
- 池田廣司（一九六七）『古狂言台本の発達に關しての書誌的研究』（昭四二 風間書房）
- 亀井孝（一九四四）「狂言のことば」（『能楽全書』五 東京創元社 『亀井孝論文集5』所収）
- 小林賢次（二〇〇〇）『狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究』（平一一 勉誠出版）
- 小松寿雄（一九八五）『江戸時代の国語 江戸語』（昭六〇 東京堂出版）

小山弘志（一九五六）「狂言の変遷」（『文学』昭三一・七）

坂口至（一九九七）「『祝本狂言集』用語考」（『熊本大学国語国文学研究』三二二 平九・二二）

永井猛（一九八七）「『祝本狂言集』翻刻と解説」（『能楽研究』一二 昭六二・三）

橋本朝生・土井洋一（一九九六）『狂言記 新日本古典文学大系38』（平成八 岩波書店）

蜂谷清人（一九七七）『狂言台本の国語学的研究』（昭五二 笠間書院）

同（一九九八）『狂言の国語史的研究』（平一〇 明治書院）

安田章（一九七三）「重刊改修捷解新語解題」（昭四八 『三本对照捷解新語』京都大学国文学会）

山崎久之（一九六三）『国語待遇表現体系の研究』（昭三八 武蔵野書院）

おおくら ひろし／人文社会科学研究所
（二〇一四年十月三十一日受理）